

はじめに

「芸術は紛争解決や平和創造に何らかの貢献ができるのだろうか」という疑問が、本書の探究の出発点である。大学学部時代から英文学を学び、その後、平和学に出会い、文学（そして芸術）の視点から平和・紛争について考察したいと願ってきた。出発点の第二は、平和の創造のためには、暴力を削減／除去するという作業が必須であるが、同時に、社会や人間関係にとっての積極的で建設的要素を育むことについて具体的に考察したいと考えたことである。そこで、平和の創造とは、「紛争」という現象を非暴力的に取り扱うこと、またその過程（プロセス）そのものであると考えた。出発点の第三は、「紛争」の捉え方を整理した上で、広義における紛争地（すなわち、東アジアは紛争地域の一例である）における暴力化前・中・後の各局面において、芸術アプローチに基づく具体的な諸提案を行うための分析が必要と考えたことである。第四には、バンクーバーでの世界平和フォーラムにおける、朗読劇ワークショップの実践経験があった。そのとき、朗読劇という芸術と、現実世界との接点において、問題の本質があぶり出されたように感じたのである。それが何であるかを明確化したいと思ったことは、本書における探究の大きな動機となったようである。

本書においては、平和創造という目標を達成するための領域を「平和ワーク」と呼び、特に平和学の視点から、主流の国際政治における安全保障の論理を批判・相対化しつつ、それをトランセンド（超越）し、新しい発想による課題への取り組みを探究する。

既に、世界的に見ても、紛争地域や平和ワークの現場において、芸術アプローチが様々な形で試みられている。しかし、それらを記録・分析し、理論化する試みは多くはない。分析対象が個々の状況に依存し複雑であることが、理論化を阻む最大の要因であろう。こうした現況を乗り越えるため、分析ツールとしての平和学の諸概念を最大限に利用する。「平和ワーク」の概念が豊富で実質的な意味を持つためには、どこまでも非暴力的で平和的なプロセスを開発

していかねばならないからである。

最初に、「平和ワーク」が指し示す範疇を明確化する。ここでは、市民社会・NGOによる非暴力介入の意義が明瞭になる。また、平和ワークにおける芸術アプローチの有効性を検討するに際し、芸術の種々のあり方の分析に、直接的・構造的・文化的暴力／直接的・構造的・文化的平和、及び紛争転換という平和学の諸概念を実際に適用する。具体的には、平和・暴力との関係における芸術のあり方を、「暴力を助長する芸術」と「平和を創出する芸術」とに分類する。さらに、後者の意味をより深く把握するために、「紛争が顕現する芸術」の概念を提案する。後に、その具体例として、ヨハン・ガルトゥングによる朗読劇 *Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica* を取り上げ、その内容と形態を詳細に分析する。

また、芸術と平和を繋ぐ諸要素として、芸術の平和利用に際しての「平和的感性」と「批判的精神」、芸術の「表現性」と「伝達性」、そして平和ワークにおける「創造性」と「対話」について論じる。これらの諸要素がすべて生きて働くことによって、紛争が顕現する芸術アプローチが、平和ワークとして十全に機能するのである。ここでは、平和ワークの主体である「平和ワーカー」は、芸術アプローチによって「市民芸術家」として活躍する。

以上の考察の後、東アジアの紛争に対する平和ワークとして、朗読劇 *Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica* を実際に活用することを検討する。まず、この朗読劇テキストに描写される紛争の内容の諸要素——主体のある行為と主体なき行為、アポロジのあり方、多様な「声」の表象と代弁、加害と被害の二元論——を検討し、東アジアの紛争に表出する問題を明確化する。次に、「朗読劇」という形態の諸特徴——紛争理解の深化、参加型主体の形成、平和的価値の創造——を検討することで、朗読劇という芸術形態による平和ワークのあり方を分析する。

とりわけ、芸術アプローチにおける平和的価値の創造は、平和ワークの中心的課題であるため、それが成り立つ諸要件——抽出性・虚構性・真実性・創造性——について考察する。しかし、そうして提示された「もう一つの未来」は、あくまで理論的なものである。より真実に近づくための「現実性」は、理

論化の過程において捨象した多種多様な「声」に再び耳を傾けることをわれわれに要請する。このように、平和ワークとは、終わりなき循環の過程（プロセス）なのである。こうした平和ワークの全過程において、核となるのは一貫してテキストに対する信頼性であり、その意味でテキストを「玩味」することが、平和ワークの持続性を保証するのである。こうして、安全保障アプローチに代わる平和アプローチの言説が生み出される。

国際政治において安全保障アプローチが主流となっている現在、政治家や外交官のみに平和・紛争の問題を委ねることなく、市民一人ひとりが、非暴力介入による平和ワークを実行するよりほかに、真の平和への道はないであろう。そして、そうした平和ワークの中で芸術の果たすことのできる役割とは、平和ワーカーが、市民芸術家としての資質を開花させることである。

本書は、一つの有効な方法として、ガルトゥングによる朗読劇という芸術の一ジャンルを素材に、平和ワークにおける芸術アプローチを論じたものである。日本を含む東アジアにおいては、世界の他の地域と同様に、様々な紛争が存在している。それらの紛争の数々は歴史的・空間的な諸条件に制約されつつ、相互に関連して存在している。これらすべての紛争を一挙に「解決」することは不可能であろう。しかし、一つひとつの紛争を個別に対処するのは、それらの関連性が無視される結果、相互に肯定的な影響を及ぼすことすら望めなくなる可能性もまた高い。この巨大な紛争の全体図を見据えた上で、下位・深層レベルに潜在する紛争の平和的転換を目指していくことが必要なのである。ガルトゥングの朗読劇 *Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica* には、そのための貴重な示唆が含まれている。ここでは、社会科学的発想・想像力を分析し発展させるにあたり、芸術また文学的発想・想像力が必要とされる。それはまた、芸術アプローチにおいて「朗読劇」という一典型を創り出すことによって、平和ワークの文脈における新しい手法の開拓をいっそう推し進める契機ともなり得ると確信するものである。

平和・政治の世界と、芸術・文学の世界を、架橋するための理論的研究と、その研究に基づく実践的活動、また活動に基づく研究……の継続的な営みが求められている。平和ワークの目標地点は、市民芸術家としての平和ワーカー

が、平和的価値創造を実践することである。そして、平和ワークにおいては、終わりなき過程そのものが重要であることもまた事実である。平和ワークそれ自体が平和的価値を担うのである。すなわち、平和ワークは単に平和に到達するための手段ではなく、平和そのものなのである。

本書は、2010年11月、神戸女学院大学大学院文学研究科に博士学位論文「平和ワークにおける芸術アプローチの可能性：ヨハン・ガルトゥングによる朗読劇 *Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica* (『ホーポノポノ「アジア・太平洋の平和」』)からの考察」として提出し、2011年2月に口頭試問を受けた上で、博士学位を授与されたものの改訂版である。博士学位論文審査の過程においては、主査の濱下昌宏先生(美学)、副査の安齋育郎先生(放射線防護学・平和学)、立石浩一先生(言語学)にご指導いただくことができた。特に安齋先生と、トランセンド研究会の藤田明史さんには、この論文のための継続的な研究会を設けていただき、多くをご教示いただいた。心から感謝申し上げたい。

執筆に当たり、多くの敬愛する平和学の先輩・仲間たちの研究と実践に学ぶことができたことも幸甚であった。また、母校である神戸女学院大学の先生方・職員の皆さんは、長期間に亘り親身になって相談に乗って下さった。市民社会・NGO活動の仲間や友人、学生たちに励ましと指摘を受け、かけがえない家族に支えられてこそ、小さくても歩みを一歩進めることができたと感じている。

最後に、本書完成までの間、適切な激励を継続的にお送り下さった法律文化社編集部の小西英央さんには大変お世話になった。心から感謝申し上げたい。

博士学位取得直後に起こった未曾有の災害をめぐる数々の暴力、さらに、世界各地における数限りない不正義に怒りを込めて、しかし現実の紛争転換に創造的に向き合いたいと思う。

なお、本書は、勤務先の大阪女学院大学研究出版助成を受けることができた。感謝して付記しておく。

2011年12月

奥本京子